

## 正誤表（『心理会計学』，中央経済社）

頁・行	誤（前）	正（後）
<b>第1章 JDM 研究のイントロダクション</b>		
23 頁・下 7	心理学の基礎的な仮説を発展させる	心理学の理論に基づいて仮説を展開する
25 頁・下 4	管理	統制
29 頁・上 11	「フレームワークを用いてプロジェクトを走らせる」ためには、一般的かつタスク固有の確立された知識が要求される。特に後者の知識は、タスク分析を通して得ることができる。	「フレームワークを通してプロジェクトを遂行する」ためには、一般的な、さらにタスクに特有の組織的な知識（institutional knowledge, 組織知）が要求され、このうち後者はタスク分析を通じて得られる。
29 頁・上 14	JDM 研究課題を検証するために適切な方法	JDM 研究の問いを検証するのに適した方法
31 頁・上 9	...正確性は JDM の質における唯一の次元である。	...正確性は JDM の質における次元の一つにすぎない。
<b>第3章 知識と個人的関与</b>		
82 頁・下 6 *	すべての認知プロセスに広がる可能性がある...	すべての認知プロセスへと浸透していく可能性がある...
98 頁・上 1	少なくとも何人かの学生が適切な知識を持っているという...	適切な知識を有する学生も少なくともいくらかは存在するという...
113 頁・下 9・ 下 11	最も直接的な操作	明白な（る）操作
113 頁・下 2	外部監査人および内部監査人の、タスクへの個人的関与の影響	タスクとの外部・内部の監査人の個人的関与の影響
116 頁・上 5	最も巨大で、	最も大きく、
116 頁・上 6	したがって、より複雑な相互作用を理解するために、主要な影響だけに留まらず、さらに研究を進展させる必要がある。	より込み入った相互依存関係を理解するためには、主たる影響だけに留まらない研究群を必要とするのである。
<b>第4章 能力、内発的動機づけ、その他の個人変数</b>		
第4章（全体）	適切な 適切である	関連する or 関係する （本章では、「relevant」はこちらのほうが文意をとりやすそう。）

124 頁・下 5	多くの専門的文献	熟練化（を扱う）文献の多く
127 頁・下 7	監査人の判断に同意する監査委員会のメンバーの判断の範囲に対して推論能力が影響しないことを...	監査委員会の構成員が監査人の判断に同意する程度に対し、推論能力が何ら影響を及ぼさないことを...
128 頁・上 1	PD 能力の結果としての監査人から内部監査人への信頼に違いがないことを...	PD 能力の結果として、内部監査人に対する監査人の依存に差異がないことを...
128 頁・上 3	4つの異なる監査タスクのための	4つの異なる監査タスクに対する
128 頁・上 12	数値	数
129 頁・下 12	まったく	相当に
129 頁・下 9	経験的な問題	実証的な問い
129 頁・下 8	限定的な	幅の狭い
130 頁・上 12	職業的な場面	専門的な環境
130 頁・下 11 131 頁・上 9 132 頁・上 3 以下本章全て	評価	評判
130 頁・下 8	第 1 に、会計専門家の立場を自ら選ぶ人々は、一様に刺激に対して高い欲求をもつことが妥当であるように思えるが、結果として、この種類の動機は適切ではなく、研究成果として、これらの環境によって提供される刺激は、ある人々にとっては高すぎる欲求であるかもしれないことが示されている。	第 1 に、専門家という会計のポジション（立場）を自ら選ぶ人々は刺激に対する高い欲求を一様に有し、結果的に、この種の動機は関係しないということがもっともらしいと思われるけれども、研究によると、これら環境によって供される刺激は、個人によっては過大であるかもしれないと立証される。
131 頁・上 4	業績と能力の動機	達成および力量の動機
131 頁・上 16	仕事環境	職務環境
131 頁・下 7	相反するものを含んでいる	はっきりしないものである
132 頁・下 7	より直接的な仕組みを通すこと	より直接的なメカニズムを通じて、
132 頁・下 4	努力目標（effort direction）における増大 * 以下ある「…における増大」・「増大された…」という訳	努力の方向性（effort direction）の強化（or 高まり） ● 「…の増大」などとしたほうが意味が通りやすいように考える。
134 頁・上 1	多くの変数があるので、動機は成果にポジティブな影響を持たない	数多くの変数が存在しており、パフォーマンスに対して動機がプラス

	(...).	の影響を及ぼさない原因となっている (...).
135 頁・上 16	公正と公平	正義と公平性
135 頁・下 7	範囲を示す	程度をいう
135 頁・下 1	...は、以下に含まれる。	...には、以下がある。
136 頁・下 15	異なる種類の成果は、その文脈に依存して公平であると知覚する...	文脈に依存し、様々なタイプの結果が公平であると認識する...
136 頁・下 3	会計人は顧客や当局のような異なる関係者についても自身の評価を維持することを求めるし、	会計士は、顧客や規制者のような様々な関係者の評判を維持する必要がある、
138 頁・上 4	刺激に対する、ある評価的な反応 (個人、出来事など)	刺激 (人、事象など) に対する評価的な反応
138 頁・上 10	気分は、単純な誘発体 (valanced) であると思われており...	気分とは、単に誘発的な、それらと関連する特定のターゲットをもたない強度の低い情緒であると考えられており、
139 頁・上 2	どちらの JDM の質が決定されたのかの基準	JDM の質が決定される規準
139 頁・上 14	あまり関心のない気楽な状況では	利害の小さな慣れ親しんだ状況では
139 頁・下 14	動機は感情に応じることがなく	動機は感情に優先し
139 頁・下 5	選択肢についての情報の広範囲にわたる探索をおこなうことに反するような	選択肢についての情報の広範な探索を行うのではなく、
139 頁・下 4	解答	その解答
140 頁・上 10	投資家のような人々を、やりそうにもない選択をするように向けるので	投資家のような人々に、そうでないならば行わないであろう選択をするよう導くことから
140 頁・下 5	不正確であるし	不正確であることもあり
141 頁・上 9	感情を片付ける	感情に対処する
141 頁・下 12	不確かな情報であるにもかかわらず固執してしまう、感情に影響する要因についての不適切な理論 (たとえば、「お金は幸せをもらす」) をもっている。	反証をするフィードバックがあるにもかかわらず固執する、感情に影響を及ぼす諸要因についての不適切な理論 (たとえば、「お金は幸せをもたらす」) を有する。
142 頁・上 2	財務比率情報を与えられた経営者	財務比率情報を提示される経営者

	は、その比率それ自体の実際の価値や、ある比率を去年の比率や業界の平均といかにして比較するかという標示より、それらの比率への感情的な反応を正確に呼び出すことができること	は、比率自体の実際の数値や、ある比率が前年の比率や業界平均に対してどのように比較されるかの符号よりむしろ、それら比率に対する感情的な反応をより正確に想起できること
142 頁・上 8	その結果、数的データにもとづくどのような投資理論とも一致しない意思決定を下すことを	結果的に、数値データに基づき投資理論が予測するであろうものと首尾一貫しない決定をすることを
142 頁・上 11	資本予算の背景	資本予算の設定という文脈
142 頁・上 15	経営者たちは、それがもっている低い経済的価値にもかかわらず、圧倒的に中立的な感情の選択肢を選んでいる	経営者らは、その経済的価値は低いにもかかわらず、中立的な感情の選択肢を圧倒的に選択したのである
142 頁・下 8	なぜなら、プロスペクト理論は JDM に関する規範理論ではなく、この状況において、感情が。ネガティブなあるいはポジティブな影響をもっているのかどうかについて述べることができないからである	プロスペクト理論は JDM の規範理論ではないから、この状況においては、JDM の質に対して感情がネガティブあるいはポジティブな影響をもつかどうか言うことはできないのである
143 頁・上 6	予測された気分の影響	気分の影響の予測
143 頁・上 9	ただ、ある 1 つの研究 (Kida et al. 1998) では	1 つの研究 (Kida et al. 1998) を除くすべては、
143 頁・下 12	必要とする	伴う
143 頁・下 11	提示	示唆
143 頁・下 10	監査を実施するために	検証を導くために
143 頁・下 9	間違いである	誤解させるものである
143 頁・下 5	JDM に対する非常に重要な	JDM にとって相当の重要性のある
143 頁・下 4	ある人の...とみなされる	ある者の...をいう
143 頁・下 3	JDM 研究における関心の従属変数	JDM 研究にとって関心事となる従属変数
143 頁・下 1	この節では、前者の特徴に関する研究については手短に触れるが、後者には最大限に関係する。	本節は前者の特徴づけに関わる研究に簡潔に触れるけれども、後者をもっとも関連性がある。
144 頁・上 4	投資家の JDM の事例報告におい	投資家の JDM の逸話的な説明では

	て	
144 頁・上 12	伝統的な文献では、自信について、1 つの従属変数として考察しており、	自信に関する伝統的文献は、独立変数として自信を調査しており、
144 頁・上 14	自信過剰は、人々が正確なものより平均して高い自信の評価をもっているときに実証される。	自信過剰は、人々が、平均して、正確なものよりも高い自信の評価づけをしているさいに立証される。
144 頁・下 4	最近の研究は、これが大きく弱点をさらしやすい仮定であることを明らかにしている。	最近の研究は、これが非常に脆弱な仮定であることを示している。
145 頁・上 6	これら違いが与えられたとき、	かような差異があるとして、
145 頁・上 8	自信過剰でない人々に対して、そのような人々については、ほとんど知られていない。	どのような人々が多かれ少なかれ自信過剰なのかについては、ほとんど知られていない。
145 頁・上 12	「男性的」になることを知覚される	「男性的」であると認識されている
145 頁・上 17	他の理論は、ある中間状態として現れる知識の自信過剰における違いを仮定する。	中間状態として生起する知識の自信過剰の差異を仮定する研究もある。
145 頁・下 3	いくつかの状況のもとでは	状況によっては
146 頁・上 1	責任帰属バイアス	自己奉仕バイアス
146 頁・上 3	知識の自信過剰におけるこれらの違いは、	知識の自信過剰のかような差異は、
146 頁・上 5	一般的には、独立変数あるいは中間状態としての自信を考察する研究は、自信過剰がより高くなるほど、正確性や規範理論の合意として典型的に定義される、より質の低い JDM に関係することを明らかにしている (Arkes 2001)。	一般的には、独立あるいは中間状態の変数として自信を調査する研究は、自信過剰の程度が高まるほど、正確性ないし規範的な理論との一致として典型的に定義される、より質の低い JDM と関係すると知見する。
146 頁・上 8	そのような自信過剰が JDM に影響すると見られることを通して示されている、いくつかのメカニズムがあるが、ほとんどの理論に共通する原理は、	それを通じて自信過剰が JDM に影響するとみられるメカニズムがいくらか提示されているものの、ほとんどの理論に共通する要素は、
146 頁・下 4	多くの研究者の関心は、実験のタ	多くの研究者は、実験のタスクに先

	スクが仮説の推定を引き起こすことであろうことよりも、自信を測定することにある。	だって自信を測定することは、仮説の推測を導くと懸念する。
147 頁・上 5	その代替的な方法としては、さまざまな自身の程度を引き出すさまざまな状況的要因によって自信を操作することが妥当である。	代替策としては、自信の程度を変動させる状況的な諸要因を変化させることにより、自信を操作するのがもっともらしく思われる。
147 頁・上 10	関連付けられる	相関する
147 頁・上 12	集合的な違い	複数の差異
147 頁・上 15	心理学研究のように、	心理学の研究と同様に、
147 頁・下 14	完全に	相当に
147 頁・下 12	意思決定支援に関する信用 意思決定支援の信用	意思決定支援への依存 意思決定支援の依存
147 頁・下 9	コンセンサス利益予測についての合意	コンセンサスの利益予測との一致
148 頁・上 9	自然実験である。	本質的には実験によるものである。
148 頁・上 10	投資家の自信に関する要因について、従属変数として考察している。	自信を従属変数とみなし、投資家の自信と関連する諸要因を調査する。
148 頁・下 4	予約価格	留保価格
149 頁・下 19	信頼評価の方法	自らの自信の評価づけのなされ方
149 頁・下 15	そのような信頼評価の仕方は、自信過小が観察された水準の影響から引き出される。	自信の評価が引き出される方法は、観察される自信過小の水準に影響を及ぼす。
149 頁・下 6・ 下 5	付属的な知識	部下の知識
149 頁・下 2	これらの研究で、JDM の質に対する自信の影響を考察しているものはない。	これらの研究のどれもが、JDM の質に対する自信の影響については調査していない。
150 頁・上 3	母集団	普通の人々
150 頁・上 6	意思決定支援によって供給されるような他の情報に対する個人の知識への過剰な信頼の原因になっている。	意思決定支援により供されるような他の情報と比べて、自らの知識への過剰な依存によるものである。
150 頁・上 7	将来の研究に向けて最も確かな道筋は、	将来研究にとってもっとも有望な道筋は、

150 頁・上 19	人々が自らの効用関数に結合させる感覚	人々が効用関数に組み込む感覚 (feelings)
150 頁・下 5	リスクに対する態度について中間状態であると見ている。	中間にある状態としてリスクに対する態度をみている。
150 頁・下 4	両方の場合において	いずれにしても
151 頁・上 7	選択肢	選択
151 頁・上 10	意見の一貫性を遂行	思考法の一貫性を論証
151 頁・上 11 158 頁・下 2	新聞は、 新聞 (が)	大衆紙 (popular press) では、 * 参考文献とされているのは、 <i>The Wall Street Journal</i> や <i>Fortune</i> 等
151 頁・上 13	多くの意思決定の理論 (最も著名なのは期待効用理論) は、	意思決定の理論の多く、特に期待効用理論は、
151 頁・上 13	リスクに対する態度において、人々の間で違いはあるが、なぜそのような違いが存在するのかは定かではないと仮定している。	人によってリスクに対する態度に差異があると仮定するが、そうした差異が存在する理由は特定していない。
151 頁・上 15	他の理論は、これらの違いを説明するために、動機と感情についての要因の組み合わせに依拠している (レビューには、...)。	これら差異を説明するために、動機づけおよび感情の要因の組み合わせを用いる研究もある (レビューについては、...)。
151 頁・下 3	直観的で	直ちに
152 頁・上 1	変数	パラメータ
152 頁・上 2	不適切な	関連のない
152 頁・上 3	混在しているが、(Larrick 1993)	はっきりしない (Larrick 1993) もの、
152 頁・上 17	不適切なタスク形式の特徴は、... 引き出すことができる...	無関係の (レバントでない) タスクの様式という特性があると、誘発しうる...
152 頁・下 12	人々は選択肢について損得勘定によって判断する傾向にある	人々は、利得ないしは損失をもたらすものとして選択をみる傾向がある
152 頁・下 6	このようにして処理の観点から彼らの JDM の質は低くなる	したがって、プロセスの観点からは、質の低い JDM となる
152 頁・下 1	そうであれば、拡大解釈すると、もし違う形式で情報が与えられれば、人々が与えられた情報に普通	同じ方向でさらに進めると、このとき、異なった様式で情報を与えられれば、同様のリスク態度を通常

	<p>は同じリスクに対する態度をもち同じ選択をおこなうということはないであろう。これは、少なくとも人々の JDM の質の一部は低いということである。</p>	<p>ならば有し、かつ特定の情報のもとでは同様の選択をする人々は、一致しないということである。このことは、人々のうちで少なくとも誰かの JDM の質が低いことを意味する。</p>
153 頁・上 7	<p>問題描写プロセスを通して、つまり損得を含むような状況の描写を通して</p>	<p>問題表象プロセスを通じて、すなわちある状況を利得ないし損失を伴うものとして表象することを通して</p>
153 頁・上 13	<p>実験の設定の間</p>	<p>処理間</p>
153 頁・下 12	<p>確実性等価額 (certainty equivalent) を含む、</p>	<p>確実性等価 (certainty equivalent) のテクニックを含んだ、</p>
154 頁・上 4	<p>ポートフォリオの危険性とネガティブな関係がある</p>	<p>ポートフォリオの危険度と相反する関係がある * リスク回避性が高いと、選択するポートフォリオの危険度は低くなるという意</p>
154 頁・上 8	<p>十分に実地的な重要性</p>	<p>大きな実務上の重要性</p>
154 頁・上 15	<p>それらの差が生じる経緯と JDM についてそれらが及ぼす影響を伴うので、これらの非常に重要な会計環境においてさらなる注意を向ける値打ちがある。</p>	<p>それらが生じる経緯および JDM に及ぼす影響とともに、これら非常に重要な会計の設定においてさらなる注目に値する。</p>
154 頁・下 10	<p>この節では、パーソナリティと JDM の議論において繰り返し現れてきた要因との影響について考える。</p>	<p>本節は、パーソナリティと JDM の議論において日常的にみられる諸要因の影響を考察する。</p>
154 頁・下 6	<p>主義</p>	<p>教義 (tenets)</p>
154 頁・下 3	<p>「そのような認知のタスクが引き寄せられ、処理される方法についての特性」</p>	<p>「認知的なタスクに取り掛かり、あるいは処理する方法の...特性」</p>
155 頁・上 1	<p>「ある人の行動を統制する知覚された原因」</p>	<p>「ある者の行動に対する統制の源に関する認識」</p>
155 頁・上 3	<p>外的な統制の所在は、人々が、ほとんど外的な機会によって強えられる要因によって起こる結果である</p>	<p>外的な統制の所在の個人は、たいていは外的な、偶然の力により結果が生じると信じる。</p>



	ると信じるものである。	
155 頁・上 8	どのような違いも	任意の違いが
155 頁・上 10	不確かな	問題のある
156 頁・上 9	研究論文は、どのような認知様式が処理を操作するのかを示さないが、その記述は問題の抽出と情報の探索に影響することを示している。	研究は、認知様式が機能するプロセスを示さないけれども、その定義は、認知様式が問題表象および情報探索に影響すると示唆する。
156 頁・上 17	どのような認知プロセスが大きな努力の受益先なのか	どのような認知プロセスが努力の増大という受取先であるのか
156 頁・下 8	一般的には、	典型的には、
156 頁・下 7	JDM の質より仕事の成果	JDM の質よりも職務のパフォーマンス
156 頁・下 5	結果として、それは、より大きい努力をして、より高い仕事の成果をもつと仮定されている	結果的に、彼ら（訳注：内的なものに動機づけられた人）は、より大きな努力を行使し、より高い職務のパフォーマンスとなると仮定される
156 頁・下 1	（冒頭ヌケ）いくつかの研究では、成果に対する統制の所在の影響を予測するための鍵は、ある個人内での所在と仕事の環境との間の組み合わせであることを示している	しかしながら、...統制の所在がパフォーマンスに及ぼす影響を予測するための鍵は、ある人の所在および職務環境の間の適合であると示している
157 頁・上 6	認知様式は人々が意思決定をおこなう際に焦点を当てる多くの代案の範囲と情報量から構成されるという	認知様式は、意思決定をするさいに人々が焦点を当てる複数の代替案の範囲、および彼らが用いる情報の量から構成されると提案する、
157 頁・上 14	Driver (1971) の尺度形式を用いている後述する研究	Driver (1971) による様式の尺度を用いる以下のような研究
157 頁・上 15	多くの選択肢	複数の代替案
157 頁・上 17	利益を大きくし、費用を小さくする	高い利益、および低い費用をもたらす
157 頁・上 19	情報の使用と成果	情報の用法とパフォーマンス
157 頁・下 10 158 頁・上 7	特定の株や債券	特定の株式
157 頁・下 9	アナリスト（MBA 学生による代用）	（MBA 学生により代用された）アナリスト

157 頁・下 3	カテゴリーの幅の尺度の形式	カテゴリーの幅による様式の尺度
157 頁・下 1 158 頁・上 11	重要な錯誤 (material error)	重要な誤謬 (material error)
158 頁・上 6	監査人の虚偽の判断	監査人による不正の判断
158 頁・上 9	選ばないであろうということを	選ぶ可能性が低いことを
158 頁・上 12	<b>Bernardi (1994)</b> は、内的な統制の所在をもつ監査人は、虚偽をより発見しやすいであろうということについて、明らかにしていないまでの予測している。	<b>Bernardi (1994)</b> は、内的な統制の所在の監査人は、不正を検知する可能性が高いと予測するが、それを発見はしていない。
158 頁・下 12	それらの多くが <b>JDM</b> の質に対して影響がないという観点から特に成功してはこなかった	<b>JDM</b> の質に対してそれら多くは影響がないとわかったという見地からいえば、特段の成功を収めてきてはいない
158 頁・下 8	影響を明らかにする研究は、これらのパーソナリティ要因が能力やその他の個人変数に相関しうると仮定される相関する未知の変数 (corelated omitted variables) の影響を検出しているのかもしれない (たとえば、 <b>Pincus 1990</b> )。	影響を発見している研究は、これらのパーソナリティ要因が能力およびその他の個人 (ヒト) 変数と相関するならば、相関する欠落変数 (corelated omitted variables) の影響を検出しているのかもしれない (たとえば、 <b>Pincus 1990</b> )。
158 頁・下 4	男性と女性、あるいは文化的な背景が異なる人々の間で、 <b>JDM</b> の違いがあるのかどうかを考察する研究もいくつかある。	研究はしばしば、男女 (men and women) 間で、あるいは文化的背景が異なる人々の間で、 <b>JDM</b> の違いが存在するのかどうかを調査してきた。
159 頁・上 3	会計の研究者にとって関心のあるグループの間で、ジェンダーや文化的背景が混成されていることを考えると、	会計研究者に関心のある集団内のジェンダーおよび文化的背景がさまざまであることによれば、
159 頁・上 5	経済的な成果...記述の研究が明示している	経済的帰結...予備的な証拠は示している
159 頁・上 7	心理学的で社会学的な	心理学的かつ社会学的な
159 頁・上 9 上 17	といえる について表している	をいう
159 頁・上 12	<b>Hofstede (1980)</b> の 5 つの諸次元	職務環境に関わる文化的要因を分

	(five dimensions) のスキームや、作業環境に対して適切な文化的要因を分類することに関連する尺度を用いることである	類するための Hofstede (1980) の 5 次元 (five dimensions) のスキームとその関連尺度を用いている。
159 頁・下 14	合理的	責任感がある
159 頁・下 13	個人主義対集団主義 (individualism versus collectivism) は、人々が自己利益に焦点を当てる文化に帰属するのか、それとも、より大きな集団の利益に焦点を当てる文化に帰属するのかの程度に関係する。	個人主義対集団主義 (individualism versus collectivism) とは、文化内の個々人が、自己の利益に焦点を当てるのか、より大きな集団の利益に焦点を当てるのかに関するものである。
159 頁・下 3	JDM の質に対するジェンダーや文化的背景の影響に関する研究成果について議論する代わりに、この節では、どのような研究が、認知や JDM の質に影響しうる他の要因におけるジェンダーや文化的背景に関係する違いについて、われわれに語ってくれるのかを議論する。	ジェンダーと文化的背景が JDM の質に及ぼす影響に関する知見を議論する代わりに、本節は、JDM の質に影響を及ぼしうる認知的、かつ他の諸要因におけるジェンダーと文化的背景に関する差異について研究がわれわれに教えてくれることを議論する。
159 頁・上 1	そのような違いはたくさんあるので、関心を寄せる構成概念としてジェンダーや文化的背景について考察する研究は、多様で完全に混成されている構成概念の影響を効果的に考察する危険を冒している。	そうした差異は数多く存在するため、関心のある構成概念としてジェンダーや文化的背景を調査する研究は、複数の、完全に混同された構成概念の影響を実質的に調査しているというリスクを冒している。
159 頁・上 11	このように	したがって
160 頁・上 4	断片的な	エピソード
161 頁・上 9	思考	推論
161 頁・上 10	根拠	源
161 頁・上 14	東洋文化圏から来た人々は、埋没図形テストによって求められるような背景から図形を抜き出す能力が低いことは、1 つの具体的な研究成果である (Nisbett 2003)。	特別の知見といえ、東洋文化圏の人々は、埋没図形テストが要求するような、背景から図形を抜き出す能力が低いことである (Nisbett 2003)。

161 頁・上 16	しかし、文化に関係する能力の違いについての今日的な研究は、 <b>Hofstede (1980)</b> の諸次元に関係していない。	しかしながら、文化に関わる能力の差異の今日までの研究は、それらを <b>Hofstede (1980)</b> の諸次元へと関連づけていない。
162 頁・上 6 上 8	文化的な集団を超えて 文化を超えた	文化的な集団にまたがる 文化間の
162 頁・上 9 162 頁・下 10	要因	不確実性回避の次元
162 頁・下 6	論理的プロセス	推論プロセス
162 頁・下 5	これらの違いのいくつかは、1 つの下位群であるらしいことを示し、一方では、その他の違いは質の低い <b>JDM</b> は、それと同じ下位群であるらしいことを示している。	これらの差異には、ある下位グループにとって比較的質の高い <b>JDM</b> となる可能性が高いことを示すものもある一方で、同一の下位グループにとっては比較的質の低い <b>JDM</b> となる可能性が高い別の差異が存在することを示している。
162 頁・下 1	構成概念それ自体としての	構成概念自体として
163 頁・上 1	代理変数となるような特定の関心の構成概念	代理するかもしれない特定の関心のある構成概念
163 頁・上 3	多様な構成概念の効果的な混成物	複数の構成概念が実質的に混じり合ったもの
163 頁・上 15	諸変数の実用的な意義の欠如	諸変数の実務上の重要性がないこと
163 頁・下 12	知識や他の重要な諸変数のような <b>JDM</b> の質に作用するタスクの複雑性と相互作用しうる。	知識および <b>JDM</b> の質に影響するタスク複雑性のような他の重要な変数と相互作用しうる。
163 頁・下 7	経験的な	実証の
163 頁・下 7	さらに、自信過剰や中間状態のような、ここで議論された諸変数の 1 つを誘発することによって機能する会計の文脈に特有の要因もあるであろう。	さらに、自信過剰のように、ここで議論された変数の 1 つを誘発することにより、中間の状態として機能する、会計の文脈にとって特有の諸要因も存在するかもしれない。
163 頁・下 5	投資家の集団対個人の基準に関する有価証券についての考えについて考察する際に	集計・個別という基準による証券に関する投資家の思考法を調査するにあたり、
163 頁・下 2	たとえば、正確であるべきことに	たとえば、正確であろうという動

	<p>対する動機（たとえば、訴訟関連のもの）と求められる結論にいたる動機（たとえば、顧客への会計責任）との相互作用が監査人のJDMの質に及ぼす影響について考察することは、興味深いものになるであろう。</p>	<p>機、すなわち訴訟の懸念、および望ましい結論に到達しようという動機、すなわちクライアントに対する説明責任の相互作用が監査人のJDMの質に及ぼす影響について調査するのは、興味深いかもしれない。</p>
164 頁・上 2	<p>したがって、概していうと、上述の要因のみに焦点を当てる研究、あるいは会計のJDMに最も特有影响する他の要因との組み合わせに焦点を当てる研究が、将来のための最大の利益となるように思われる。</p>	<p>全体として、このため、これら諸要因が単独で、あるいは他の要因と合わさって、会計のJDMに最も独自に影響を及ぼすような道筋に焦点を当てる研究が、将来に向けて最も関心のあるものかもしれない。</p>
164 頁・注 1	<p>基本的な</p>	<p>初歩的な</p>
164 頁・注 2	<p>道徳性の開発 倫理学や道徳性に依拠することを 含むようなJDMの質を規定</p>	<p>道徳性（モラル）の発達 倫理と道徳性（モラル）への依存に 関わるJDMの質を決定する</p>
164 頁・注 3	<p>諸変数のJDMの質への影響</p>	<p>JDMの質に対するその影響</p>
164 頁・注 4	<p>直観的には、監査人のような専門家に大きな違いがあるということは、どのような種類の能力についてもありそうにないが、経験的な証拠からは、そうなることが示されている</p>	<p>監査人のような専門家は、いかなるタイプの能力についても大きな差異があるとは、直観的には思われな いものの、実証研究の証拠はそうであることを示している</p>
164 頁・注 5	<p>複合的で独立した 運動 博学</p>	<p>複数の独立の 身体・運動感覚性（身体的） 自然主義者</p>
164 頁・注 6	<p>ときどき このようにして、能力は実験や観察調査において測定される傾向にある。</p>	<p>時として したがって、能力は、実験の、あるいは質問紙の設定で測定される傾向がある。</p>
165 頁・注 7	<p>その影響は明らかに妥当なものである</p>	<p>そうした影響は明確にありそうである</p>
165 頁・注 11	<p>評価 から引き出されているの</p>	<p>評判 に起因するもの</p>

165 頁・注 12	引き起こす	導く
165 頁・注 13	現在の努力に対する動機の影響の説明としての自己効力感の難しさは、ある人が現在も高い水準の成果を十分に期待できるタスクを経験したことがなければ、特定のタスクのための自己効力感が高そうにないことである。 結果として、一定期間の時間をかける状況だけではなく一回試行の状況であっても、高い動機が高い自己効力感を引き起こすことはないようである。	モチベーションが現在の努力に及ぼす影響の説明としての自己効力感の困難は、高水準のパフォーマンスを現段階で予測するために十分にそのタスクをある人が経験しないと、特定のタスクに対する自己効力感が高い可能性は低いことである。 結果的に、1 回限りの試行の状況では、高いモチベーションが高い自己効力感を導く可能性は低く、むしろある期間を超えてのみなのである。
165 頁・注 14	なんらかの緩和点 動機と JDM の質との関係	どこか中間の地点 モチベーションと JDM の質の間の逆 U 字の関係
165 頁・注 15	サーベイ 会計責任 一般的な動機他の前提に	質問紙の 説明責任 一般的な動機に先立つ要因 (antecedents)
165 頁・注 16	技術	技法
165 頁・注 17	説明したときの出来事のほうに、より高い確率を割り当てるときに起こっている	説明した場合に、ある出来事に対してより高い確率を割り当てるときに起こる
166 頁・注 18	モデル構築のような物理的なタスク これらの研究は、ここで議論されていない。	モデルを構築することのような身体を使うタスク (a physical task) こうした研究は、議論されない。
166 頁・注 19	期待される感情は期待される効用に関するものではなく、むしろ JDM に作用する 1 つの独立した要因であることに留意している	期待される感情は期待効用の一部ではなく、むしろ JDM に影響を及ぼす別個の要因であると特に言及している
166 頁・注 20	彼女の研究のなかでは操作されていないが、「報酬／もうけ」と「罰／損失」という用語でフレームされたインセンティブ契約間におけ	研究では操作されていないけれども、Luft (1994) の被験者は、報償・利得および罰則・損失に関してフレームづけがなされたインセンティ

	<p>る選択の際、Luft (1994) の被験者は感情的な反応を予測しているように見える。</p>	<p>ブ契約の間で選択するさい、感情的なリアクションを予測されているようである。</p>
166 頁・注 23	<p>これらの知見については多くの議論があるが、従属変数としての自信について考察する研究は、一般的に、自信過剰と JDM の質との間の関係はほとんどないことを明らかにしている (Plous 1993)。</p>	<p>自信を従属変数として調査する研究は、典型的には、自信過剰と JDM の質の間の関連がほとんどないことを知見する (Plous 1993) が、こうした知見については大論争がある (たとえば、Sporer et al. 1995)。 * 参考文献のヌケあり</p>
166 頁・注 24	<p>仮説の推定 (hypothesis guessing) とは、被験者が実験で検証されている仮説を理解することを意味する。危険なのは、彼らがそのときに意図的に意思に反して仮説に一致するように行動すること、あるいは仮説に一致しないように行動することである。</p>	<p>仮説の推測 (hypothesis guessing) とは、実験で検証中の仮説を被験者が理解することを意味する。危険なのは、被験者らがこのとき、そうでない (訳注. 検証中の仮説を理解していない) ならばしないのに、仮説と首尾一貫するように意図的に行動することや、そうでないならばしないのに、仮説と首尾一貫しないように行動することである (Cook and Campbell 1979)。* 参考文献ヌケ</p>
166 頁・注 26	<p>測定尺度が、サーベイや実験に起因する傾向があるのは、一般的に、アーカイバルの測定尺度は有用でないからである。これらの要因の操作は、それらを固定化されたパーソナリティ特性と考えると適切ではなくなる。</p>	<p>尺度は、質問紙や実験からもたらされる傾向があり、なぜならアーカイバルの尺度は、典型的には、入手可能ではないためである。これら要因の操作は、それらが固定的なパーソナリティ特性と考えると、もっともらしくはない。</p>
166 頁・注 27	<p>ここで、セックス (sex) とは、女性と男性との間の生物学的な違いをいい、ジェンダーの尺度として一般に用いられているものであることに留意されたい。</p>	<p>性別 (sex) は、ここでは女性と男性の間にある生物学的な差異をいい、ジェンダーの尺度として典型的に用いられることに注意されたい。</p>
166 頁・注 29	<p>この章は、これらの違いについての根拠、つまり、それらが心理学上のものであるのか、社会学上の</p>	<p>本章は、これら差異の基盤、すなわち、それらが生理学的なもの (physiological) なのか、社会的な</p>

	ものであるかについては、議論していない。	ものなのかを議論しない。
166 頁・注 30	文化の違いに関する特定の会計研究については、その大部分が、 <b>JDM</b> の質の問題よりもマネジメント・コントロール・システムの研究課題や変数を考察しているので、この節ではレビューしていない。さらに、この節では、会計研究は繰り返し Hofstede (1980) の研究を採用しているので、他の文化的な違いの分類学については議論していない (この研究のレビューは、Harrison and McKinnon 1999) を参照されたい)。	本節は、文化的な差異に関する特定の会計学研究をレビューせず、なぜならそれらの大多数は、 <b>JDM</b> の質の論点よりもむしろ、マネジメント・コントロール・システム研究の間いおよび変数を調査するからである。さらに、本節は、文化的な差異のその他の分類法を議論することはなく、なぜなら会計研究では、Hofstede (1980) の研究を日常的に用いているためである (当該文献のレビューについては、Harrison and McKinnon (1990) 参照)。
<b>第 5 章 認知プロセス</b>		
168 頁・上 8	原因となる認知プロセスを直接的に目標に定めるならば、質の低い <b>JDM</b> を改善する方法は最も効果的である。	質の低い <b>JDM</b> を改善する手法は、原因となる認知プロセスをそれが直接に標的とするならば、最も効果的である。
169 頁・上 1	要求する。	要求するかもしれない。
171 頁・上 1	(費やした努力)	(費やされる努力)
171 頁・下 12	<b>JDM</b> における予測可能な誤りを生んでしまうというコストも避けられない	<b>JDM</b> の予測が可能な誤りをもたらすという点において回避できないコストがある
172 頁・上 2	認知プロセスよりはむしろ	認知プロセス以外の
172 頁・上 3	操作または測定 of どちらかを含んでおり、また後者の場合は、さらに直接的か間接的かで分類される。	操作ないし測定 of 何れかを伴うものとして分類され、後者については、直接的に、あるいは間接的になされる。
172 頁・上 7	ある特定の話題における事前の指示を報告するよう要求する	話題となる領域の事前の説明を報告するよう求める
172 頁・上 16	直接的測定法は、実験環境の中でしか有効でないというのが一般的な考え方である。	これらの方法は、典型的には、実験の設定においてのみ利用可能である。
172 頁・下 5	鍵となる批判は、言語化の要求が、	主たる批判は、言語化するように要



		求することは、
173 頁・上 6	典型	標準 (norm)
173 頁・上 11	1 つの方法は、特定のプロセスの説明を前提として、そのようなアプローチが作用していることを暗示するような質問をすることである。	1 つのアプローチは、特定のプロセスの説明を仮定し、そうしたプロセスが作用していることを指し示すであろう質問をすることである。
173 頁・上 12	たとえば、Hopkins (1996) は、複合金融商品の財務諸表上の分類が JDM に影響を与えるのは、それが負債か持分かについて被験者が最初におこなった分類を通じてであるという前提を置く。	たとえば、Hopkins (1996) は、複合金融商品の財務諸表上の分類は、それら金融商品の負債もしくは資本としての被験者の分類をまずは通して影響を及ぼすと仮定する。
173 頁・上 15	実験実施後にこの説明をするために、Hopkins は、被験者に対して、実験のはじめに勘定残高のリストを用いた負債資本比率を計算させている。	この説明を実験後に調査すべく、彼は、研究において以前に見た勘定のリストを用いて負債資本比率を計算するよう被験者に依頼する。
173 頁・上 18	実験後の質問は、あらゆるプロセスに有効であるならば、優位性をもつことになる。	実験後の質問は、それらが任意のプロセスにとって有効であるという点で優位性がある。
173 頁・上 19	しかしながら、質問された点について、被験者の記憶違いがあるかもしれないで、質問は採用しづらいかもしれない	しかしながら、こうした質問は、研究内の当該時点で被験者が記憶の問題を経験するかもしれないため、利用には意外と困難がありうる
173 頁・下 10	特定の認知プロセスのみを捉え、	特定の認知プロセスのみと関係するという点で、
173 頁・下 8	知識測定に向け	知識の測定につき
173 頁・下 7	再認テストでは、どの程度まで情報が記憶され検索されるのかを調べるため、まず既に出てきた情報をあらかじめ提示する。	再認テストは、情報が記憶され、検索される程度を調査するため、以前に見られた情報を人々に提示する。
173 頁・下 5	また、そのテストにおいては、不正解の選択肢 (distractors) やあらかじめ見せていない項目も用いるため、単にすべての項目に反応す	それらはまた、紛らわしい選択肢 (distractors) や以前に見られなかった項目を提示するため、すべての項目に肯定的に反応するだけでは、

	るだけでは、記憶の完全な検索には至らない。	完全な検索を人々がしているようにはみられない。
173 頁・下 2	手がかり検出理論	信号検出理論 (signal detection theory)
174 頁・上 1	特定の項目の情報	特定の話題についての情報
174 頁・上 5	手がかり	プロンプト (prompts) 【訳者注 2】
174 頁・上 6	統制手続き	統制
174 頁・上 12	心理学者は資料を作るが、	心理学者は無意味な (実験の) マテリアル (nonsense materials) を創作するが、
174 頁・上 14	検索の質が異なる結果とみなされてしまうということである	検索の質に関して異なる結果をもたらす
174 頁・上 15	すなわち、再認テストでの被験者の基礎的なタスクは、「以前見た」、「知っている」、「新しい」、および「知らない」ということを把握することである。	再認テストにおける被験者の基本的なタスクは、どの項目が「既視である」または「既知である」のか、どれが「新規である」または「未知である」のかを見つけ出すことである。
174 頁・下 10	これは、再生テストの結果や記憶を強化する方法とは不整合である。	その記憶内の力の強さや再生テストの結果とは首尾一貫しないものである。
174 頁・下 9	第 3 は、タスク情報によって形成される刺激が結果に影響を及ぼしてしまう可能性があるからである。これは特に、手がかり再生テストに関連する固有の問題であり、両テストの差異に悪影響を及ぼしうる。	第 3 に、これらの差異を悪化させる手がかり再生に関連する特定の問題は、プロンプトは、出力干渉 (output interference) をもたらしうるタスク情報の 1 つの形態であることである。
174 頁	第 4 は、被験者は、実験時に問われた情報を思い出すことができるが、判断や意思決定をおこなう際に自身で形成した情報に着目してしまう点である。 そのことと一貫して、再生は JDM と単純には関係しない。なぜなら実験者は、被験者がすることとそ	第 4 に、被験者は問われると実験の情報を想起することができるかもしれないけれども、判断や意思決定を行う際に自身で創り出す情報に焦点を当てるかもしれない。 結果として、こういったことを被験者がなしていると実験者ははっきりと理解できないため、再生は

	のものを捉えることはできないからである (Moser 1992)。	JDM とは何ら関係がないかもしれない (Moser 1992)。
174 頁・下 1	別々に	さまざまに
175 頁・上 1	それらの	これらの
175 頁・上 7	購入する	入手する
175 頁・上 14	興味深いことに、これまでの研究から、情報探索処理の分析においてどの方法を選ぶかが重要であることが示されている。	興味深いことに、研究は、情報探索のプロセスを研究するさい、手法の選択が重要であると示している。
175 頁・下 9	以上のように、研究者は、これら手法選択の問題、特に、関心のある独立変数と関係する情報探索行動について、用いる方法ごとに差異が生じる可能性があるということについて、少し気にかけておく必要がある。	結果的に、これらの問題、特に、関心のある独立変数と手法に関連する探索行動の差異とがどの程度まで相互作用するかにつき、認識しておく必要がある。
175 頁・下 5	問題表象を測定する際、研究者は、被験者にプロトコル法や、筆記による分析をおこなわせることができる	問題表象を測定するさい、研究者は、プロトコル法を用いたり、あるいは被験者に筆記分析 (written analyses) を供するよう依頼したりできる
175 頁・下 3	この筆記による分析は、具体的にはタスクに依存して、膨大な計算、物語的な記述、もしくは絵などのような形式をとる。	これら筆記分析は、タスクに依存して、数値計算、説話 (ナラティブ) の記述、あるいは絵といった形態をとりうる。
175 頁・下 2	たとえば、Vera-Munóz et al. (2001) は、被験者に、仮想のクライアントに対して非投資の意思決定をする助言を与えるメモを書かせている。	一例として、Vera-Munóz et al. (2001) は、架空のクライアントに対し、投資の引きあげの助言を与えるメモを書くように被験者に求める。
176 頁・上 3	この方法では、研究者は、被験者に対して、分析結果を解釈するよう要求することもできる	研究者はまた、提示された分析を解釈するよう被験者に依頼することもできる
176 頁・上 6	処理	手続
176 頁・上 6	しかしながら、日常の処理と整合的であるがゆえに、人は自身の処	しかしながら、日々の職務と整合性があることは、人々がその処理の部

	理の一部分だけを記録しがちであるというデメリットもある	分的な記録のみを文書化することに慣れている点において、不利益を創出しうる
176 頁・上 11	これらの手法は、研究者が、再生や再認について以下のような特定の仮説を有している場合のみ有効に機能する。すなわち、再生や再認といった処理が、発見事実と、記憶検索の結果によってのみ予測される帰結とを区別しうるという仮説である。	これら手法は、研究者が、発見事実 (the findings) と記憶検索の結果のみに基づき予測されるものとを区別する、再生や再認についての特別な予測を有する限りにおいて機能する。
176 頁・上 15	研究者は、プロトコル法、もしくは、単純に被験者にいくつかの手がかりを与えただけで、プロンプトがある場合もしくはない場合に、説明や予測をさせることで、仮説生成プロセスを測定することができる。	研究者は、プロトコル法により、あるいは、プロトコルの有無のそれぞれにつき、所与の手がかりの集合に対する 1 組の説明や予測をもたらすよう被験者に単に求めることにより、仮説生成プロセスの測定をなしうる。
176 頁・下 15	プロンプトとしては、仮説のサンプルを提示することや、上司など他者から別の仮説を提示されることなどが考えられる。	プロンプトは、サンプルの仮説、あるいは上司のような他の (情報) 源により表向きは提示される仮説ということになる。
176 頁・下 13	しかしながら、研究者は、プロンプトによって潜在的に生み出される可能性のある他の変数への影響がないかどうかを検討する必要がある。	しかしながら、研究者は、プロンプトにより潜在的に創出される出力干渉が他の諸変数と相互作用しないかどうかを考える必要がある。
176 頁・下 10	プロトコルの影響を超えて、	プロトコル法の他に、
176 頁・下 2	まじめに	真剣に
176 頁・下 1	ある特定の上位者によって生成された仮説の集合	ある特定の上位者により生成されたとされる仮説
177 頁・上 2	被験者は、通常とは異なる評価処理を採用してしまうかもしれない。	被験者は、そうした情報がないであろう場合と比べ、異なった評価プロセスに従事するかもしれない。
177 頁・上 4	とても信用できるものと	高い確率で生じるものと
177 頁・上 5	ポイントとなるのは、	ここでもポイントは、

177 頁・上 9	探さなければならない	しばしば探さなければならない
177 頁・上 10	処理を決定づける要因を測定する「間接的測定」は可能だろうか。	「間接的な測定」、あるいはプロセスを決定する諸要因の測定は、可能だろうか。
177 頁・上 13	広義に	大部分が
177 頁・上 14	知識構造や教育・経験を用いて情報探索を間接的に測定するだろうか。	知識構造により情報探索を間接的に測定するのだろうか、それとも教育・経験を用いるだろうか。
177 頁・上 15	もし仮に、知識構造を情報探索の代理変数として用いるならば、研究者は、すべての JDM の質の効果が、同じく知識構造により影響を受ける記憶検索など他の処理ではなく情報探索処理に起因することになってしまうという難しい状況に直面するだろう。	もしその代理変数として知識構造を用いるならば、記憶検索のように、知識構造によって影響を受けもする他のプロセスよりむしろ、任意の JDM の質の影響は情報探索プロセスに起因するとする困難なタスクに直面する。
177 頁・上 21	企業の人材選抜の手続き	企業の選考手続
177 頁・下 4	違う順で並べられた	違った順序で
177 頁・下 2	知識や性格により、被験者が研究者がおこなう操作を	もしその知識や他の個人特性がそうではないものを示唆するとすれば、そうした操作を被験者が
177 頁・下 1	たとえば、知識構造が優れている監査人は、実験者のインストラクションとは無関係に、自分の知識に基づいた順序に従って情報を探すだろう。	たとえば、高度に構造化された知識を有する監査人は、それ以外のことをするようにとの実験者のインストラクションとは無関係に、自己の知識構造によって示される順序で情報を探索するかもしれない。
178 頁・上 2	また他方で、認知処理の操作は、同時にほかの変数に影響されるかもしれない、そのことがその処理の効果を取り出すことを困難にするという潜在的な難しさも想定される。	またもう一つの困難は、認知プロセスに向けた操作は他の諸変数に同時に影響を及ぼすかもしれない、プロセスの影響を分離することを難しくすることにある。
178 頁・上 9	Sedor (2002) は、アナリストの異なる処理、特にアナリストによる証拠評価の多様性を検証するため	Sedor (2002) は、様々な方法で処理するよう、特に差別的に証拠を評価するようにアナリストを誘発する

	に、実験時に提示する将来の経営計画の形式を操作した。	べく、経営者による将来計画が提示される様式を操作する。
178 頁・上 11	Sedor は、被験者に対する経営計画の検討方法に関する操作チェックの質問をいくつかすることで、提示する形式の操作が証拠評価に影響を与えるということを検証する。	彼女は、マテリアルについて考えた方法についていくつかの操作チェックのための質問をすることにより、表示様式の操作が証拠評価に及ぼす影響があることを確証する。
178 頁・上 13	また、Sedor は、質問に対する被験者の反応を分析の媒介にして予想される思考方法が、被験者の実際の判断と関連しているということを示している。	彼女はまた、これら質問に対する被験者の回答を分析において媒介変数として利用し、予測される思考法は被験者の判断と関連することを知見する。
178 頁・上 17	操作には予測効果があり、問題表象がその後の判断とも関係する	操作には予測される影響があり、問題表象とそれに続く判断を関連づけもする
178 頁・下 13	Kadous and Sedor は、再認テストを用いて問題表象を測定しているが、この方法では記憶検索を反映した測定となってしまうため、問題表象の測定としてこの方法を用いることは望ましくない。 さらに、情報探索など他の処理は一定に保たれていなければならない。	再認テストを用いて問題表象を彼らは測定するけれども、彼らの設定において、この測定は記憶検索をむしろ反映する可能性が低い。 さらに、情報探索のような他のプロセスは、一定に保たれている。
178 頁・下 10	直接的測定法、間接的測定法、処理操作のいずれもがデメリットを有しているため、研究者は、処理を研究する代替的手法を発展させている。	直接的測定、間接的測定、さらにプロセスの操作は困難でありうるため、研究者は、プロセスを研究するための代替的な手法を発展させてきた。
178 頁・下 6	1 つのアプローチは、想定される処理の困難さに対する JDM の改善方法の影響を検証することにより、JDM における処理を推論することである。	1 つのアプローチは、仮説付けられた処理の困難さを対象とする改善手法の JDM に及ぼす影響を研究することにより、JDM の根底にある処理を推論することを伴うものである。

179 頁・上 3	比較的短時間で被験者実験をおこなうことができる	比較的少ない被験者の時間 (subject time) でそれを行える
179 頁・上 4	しかしながら、推論の妥当性に対する批判として、研究者が、JDM の改善方法についての観察される影響について、代替的な説明を無視してしまうという点が挙げられる。	しかしながら、推論の妥当性にとって非常に重要なのは、JDM の改善手法の観察された影響に対する代替的な説明を研究者が排除することである。
179 頁・上 7	監査計画策定時の確率判断における監査人の意思決定支援を提供している	監査計画を策定しているさいの確率判断に対する意思決定支援を監査人に提供する
179 頁・上 9	記憶検索と仮説評価の困難さから、監査人の JDM は低品質になるという仮説を立てている。	記憶検索および仮説評価の困難さゆえに、これらの判断における監査人の JDM は質が低くなると仮説付ける。

\* 「誤」というよりも単なる好み。

Ver. 2021/11/30 (179 頁まで)